

7. 学院生の研究テーマと学外発表・交流

7-1 研究発表会での発表内容概要

7-1 (NO-25) 兵庫県の漁業の現状と今後

(2013年12月発表)

6期 さかなチーム

国産魚の消費拡大を政府が呼びかけ、カツオ・イカ・サンマ・ブリの料理を要望している。海と魚の実情と私たちの暮らし 水産資源の減少・枯渇養殖漁業 後世への伝承。魚食文化をまとめ高級魚の完全養殖・海洋牧場・海底耕運にも及んでいます

7-2 (NO-26) 絵本で綴る有機農業

(2013年12月発表)

6期 手作り絵本の会

次世代の子どもたちに有機農業の一端を手作り絵本「コウノトリ育むお米物語」として紹介しています。出前用紙芝居・点字付き絵本も作成しました

7-3 (NO-27) 自立した高齢者を目指して

(2014年12月発表)

7期 SGS—7

SGSの6年生となり、健康をめざしながら高齢者の自立をテーマとした。具体的な目標として真南条で丹波ささやまの黒豆栽培に取り組んだ。超高齢社会の状況・有機農業や農薬国連食糧農業機関の動きなどを調べている。SGSの高齢者の集まりは再び学んで次世代のために理念の元で仲間と一緒に取り組むことによりそのパワーを発揮する条件が備えていると感じた。

7-4 (NO-28) 手作り食物酵素

(2014年12月発表)

7期 SGS—7

「手作り食物酵素」を作ることをメインに研究し、それが何であるのかを酵素の学習のなかで試飲しながら探ってみた。酵素とは私たちの理解、微生物と酵素の関係、発酵と酵素、手作り酵素の作り方にまとめ、発酵に関わる8社の工場見学を実施した。人体に及ぼす効果を説明しにくい保田ボカシで栽培された大根の酵素を飲んだ結果花粉症にかからずに済んだという例がある。

7-5 (NO-29) 日本の漁業の現状とその課題

(2014年12月発表)

10期 育てる漁業学習グループ

ご飯からパン、魚から肉へと食習慣を変え、それが結果として日本の農業・漁業の危機を招いている。私たちは漁業・魚食の現状と課題・解決策を学習し、その復活に向けて漁業関係者のみならず消費者が英知を研修して解決策を探さなければならない

7-6 (NO-30) 日本人とお米

(2014年12月発表)

11期 ご飯愛好会

私たちの多くは小学校のパンとスキムミルクの給食世代である。パンを食べると頭が良くなるといわれた。しかしカロリーベースの食料自給率40%、主要国では類をみないほど外国に食料を依存している。国産米を主食として生活の基盤が備わって欲しい。ご飯食は素晴らしい、ご飯食を復活させるために、次世代に引き継ぐためになどを追求し、提言もしている。

7-7 (NO-31) 食の安全と TPP

(2015年12月発表)

12期 食の安全と TPP

TPP を調べ、輸入食品の現状や安全性や添加物・残留農薬を追求し、検疫や遺伝子組み換え食品、食品表示などの問題等、食品の安全性を研究した。日本の食料自給率も調査し、私たちに何ができるかの提案を実施した。

7-8 (NO-32) 再生可能エネルギーと脱原発への道

(2015年12月発表)

11・12期 クリーンアース

2011年の福島原発の事故があった。COP21 回パリ会議が示すように地球温暖化を防止し、原発事故の根絶を願い子孫に住みよい地球環境を残すことを目標に取り組んだ。また具体的な対策として、再生可能エネルギーと省エネの普及への研究活動を実施した。

水素エネルギーも研究していきたい

7-9 (NO-33) 食育に関する考察 次世代の子どもたちへ

(2016年12月発表)

チーム食育

7-10 (NO-34) 食品添加物と健康

(2016年12月発表)

12期 添加物見極め班

7-11 (NO-35) 養父市の地域創生

(2016年12月発表)

13期 東條国広

地域創生とは少子高齢化や人口減少に対応し、将来にわたって活力ある地域社会を構築していくための施策であります。テーマの狙いは消滅可能都市が元気ある町づくりを目指す研究を、国土の73%を占める中山間地域の中で、過疎化と高齢化が急速に進む養父市を指定し行いました。高齢化が進み、耕作放棄地の増大等の課題を抱える中山間地域において、高齢者を積極的活用するとともに民間事業者との連携による農業の構造改革を進めることにより耕作放棄地の再生、農産物・食品の高付加価値化等の改革的農業を実践

し、輸出も可能となる新たな農業モデルを構築する、養父市の強い決意と実行力で徐々に成果が現れています。

7-12 (NO-36) 日本の農業・有機農業を学ぶ

(2016年12月発表)

12期 有機農業&元気かい

シルバー大学院・前期3年間の講義、校外研修、セミナーなどで、日本経済と農業、先進国の農業、農業の持つ多面的価値、そして有機農業の大切さを知った。また、淡路、但馬、丹波、西播に出掛け特色ある有機農家の圃場を見学し、話を伺った。身の回りの健康から医療、産業、経済に係る問題に関して、『安全良質な農作物を育てる有機農業がその解決策を持っている』ことに気づいた。しかし有機農業はまだまだ小さい。有機農業を支えるには有機農家の皆さんをよく知り、自分達も有機農業を体験し、その良さを理解し支える・協働することが大切と思った。私達グループは、「くーねる会」を土台に、真南条営農組合、食のビーナス、しあわせの村での農園サポートを行ない、保田ボカシによる有機農業を実習し自身の体験を踏まえて、有機農業を応援していきたい。

7-13 (NO-37) 水の研究 兵庫県の湧水を訪ねて

(2016年12月発表)

7期・10期 SGS7, 10

7-1 4 (NO-38) 明石海峡のさかな

(2016年12月発表)

13期 鹿の瀬ブルース

シルバーカレッジ2年の時、授業において明石浦漁協の漁師であった山崎 清張氏の講義で明石の魚は何故おいしいのか。どのようにして捕っているのか。現状はどんな状態なのか等を詳しく教えられ明石海峡周辺の魚に興味を抱いていたところ大学院にてグループ学習をすることとなりました。早速魚が好きなメンバーが集まり魚の宝庫である鹿の瀬での魚釣りにまで話がはずみ、魚について学習しましょうとなりました。そのときに皆でグループ名を「鹿の瀬ブルース」研究テーマを「明石海峡のさかな」にしようと命名しました。

- 1) 明石近辺で捕れた魚は何故おいしいのか。
- 2) 水産業の現状はどうなっているのか。
- 3) 漁獲の水揚げ量が大幅に減少している理由は何故か。
- 4) 改善策としては「里海作り」が必要である。

7-1 5 (NO-39) 「日本酒を考える」ーその魅力と功罪ー

(2017年12月発表)

11期 につぼんのさけ物語

ユネスコにより「日本の伝統的な食文化」が無形文化遺産に登録された。日本の食文化に欠かせない日本酒についても、会席料理や茶事等の和食との関連は非常に深いものがある。

*日本酒の素晴らしいところはその味だけでなく、多くの蔵元が地域に存在し、地域文化と密接に関係していることにある。地元の食材や料理は勿論、冷や爛といった飲み方、酒器や芸事などの酒文化の奥行き、地域の歴史や風土。味や香りといった『グラスの中』だけでない日本酒の魅力も知ってもらいたい。日本酒の功罪については、酒と健康・料理との相性・飲み方・酒器の変遷・評価方法・酒と文学・「酒」ごよみ・アルコール依存症・飲酒運転等について検討考察した結果を報告する。

7-1 6 (NO-40) 「コットンから見た日本の衣と農」

(2017年12月発表)

14期 藤本明美

KSCでのグループ学習テーマは「衣服と環境～古着の行方を追いかけて」でした。卒業後「米つくる会」という畑のグループに入会し、毎週通うことになった圃場で、ある企業のコットン栽培プロジェクトに出会うことになりました。調べてみるとコットンの国内自給率は0%・・・ビックリしました。江戸時代には大いに繁盛していた綿織物産業。何故、コットン栽培は行われなくなったのか？また、何故、東日本大震災以降、全国各地でコットン栽培プロジェクトが立ち上がってきたのか？それを調べていくことが、「衣服の環境問題」を考えていく上で、大きなヒントになる気がしました。コットンの歴史、フィールドワークで調査したコットンプロジェクトの内容を報告します。

7-1 7 (NO-41) 有機農業の体験と健康

(2017年12月発表)

12期 有機農業&元気かい

グループ研究仲間と4年間有機農業を体験して来ました。レタス、トマト、空豆、赤じゃが、黒豆、お米等々の20種を。昼食時のもぎたての味には感動します。瑞々しさ、柔らかいが確りした噛み応え、香り、甘さ、美味しさ、これがレタス、これがトマトなんだと。「じっくり」「ゆっくり」「つづける」ことが基本と知りました。さらに仲間との体験で大切なことに気づきました。①健康な食事とは健全な土の成分を摂取することで、安全良質な野菜からのみ可能である。②農作業と仲間との共同作業は体・頭・心の最適な運動になる。③プライドを持って地域の食と環境を守り繋いで行く、これも高齢者の生き方である。この3つです。

7-18 (NO-42) 日本の食品ロス問題

(2017年12月発表)

14期・15期もっていない

7-19 (NO-43) 「再生可能エネルギーと脱原発への道 Part II」

(2018年12月発表)

クリーンアース

SGS前期3年間、同テーマで取り組み、今回は後期3年間の取り組みを報告致します。

まず「脱原発」では福島原発事故から7年8カ月経過した現状を汚染水、廃炉、原発を巡る訴訟、被災地の現状等を調査・分析し、福島・北海道のフィールドワークを通じて体験し、今後の進むべき道を提案します。一方、「再エネ」は地球温暖化防止の必要性・世界的な動向を踏まえ、日本の現状・課題を明確にすると共に、私たちが実践できることとして、子孫に住みよい地球環境を残すことをめざし、地球温暖化防止のために、地域ボランティア活動を通じて神戸市民に対して再エネと省エネの必要性をアピール（啓発）した実績を報告致します。

7-20 (NO-44) 「次世代における環境・エネルギー」

(2018年12月発表)

14期 地産地消

地球温暖化対策の中でCO₂排出ゼロの水素エネルギー社会の実現と、次世代における「地産地消型」新エネルギー分野を中心に調査研究を行った。2020年の東京オリンピック・パラリンピックでは輸送手段として燃料電池のバスや乗用車が導入され、また選手村などには「水素発電」による電力供給を行うなど水素社会に向けて大きな転換点になる可能性がある。地産地消型エネルギーとして、太陽光やバイオマス・風力などの再生エネルギーを利用して水素を作りそれを貯蔵して再び活用していく、地産地消型水素社会の研究を行った。

7-21 (NO-45) 「マイクロプラスチックによる海洋汚染」

(2019年12月発表)

15期 ラ・メール

世界の海に3億1000万トンのプラスチックごみが存在し、毎年新たに800万トンのプラスチックごみが海に流入しています。地球のいたる所で、プラスチックごみにより多くの生物が生命の危機にさらされ、小さな魚や貝がマイクロプラスチックを誤食し、人間にも影響を及ぼしかねない状況にあります。プラスチック無しでの生活が考えられない現代、プラスチックごみ問題は重要な環境課題です。マイクロプラスチック汚染の現状と問題点の調査、そして「プラごみ削減」に向けての提案をいたします。

7-22 (NO-46) 「有機農業を考える」

(2019年12月発表)

15期 アグリくん

安全安心な食物を作る有機農業について研究することとしました。海外の有機農業の現状に比べて日本の現状は非常に遅れています。なぜ日本は有機農業が進まないのでしょうか。それは消費者が農薬の危険性に対して余り関心を持っていないことや、スーパー等で安くて形の良いものだけを購入してしまうことが大きな原因と思われます。日本の有機農業の現状から流過程の現状、農薬・肥料の危険性、我々が経験したり見たりした有機農業の現状を踏まえて今後の取り組み方を考えていきたいと思い、取り組みました。

7-23 (NO-47) 「次世代につなぐ里山を目指して」

(2019年12月発表)

15期 里山守り隊

少子高齢化の現代、里山をめぐる問題は「限界集落」が象徴するように危機的状況にある。年々深刻さを増す獣害問題及びそれと密接に関連して耕作放棄地の増大がある。このまま手をこまねていると近い将来消滅集落になりかねない。そうは思っても微力な我らに何ができるか、まずは実態をこの目で見ることから始めた。机上の空論よりも実地に体験することが大事だと考え、里山に足を運んだ。いろいろな発見があった。冒頭に述べた少子高齢化は里山地域により一層厳しくのしかかっている。要は里山に賑いを取り戻す、それが唯一無二の解決策である。我らは身の丈に合った活動で何とか一人でも多くの里山ファンを増やそうと願っている。

7-24 (NO-48) 「原子力発電の環境への影響」

(2019年12月発表)

15期 アトム&ウラン

原発事故という世界に類を見ない過酷事故を経験し、再稼働に反対する民意を無視して政府や電力業界は原発を維持し原子力政策を推進している。トイレの無いマンションと評される原発は後世にとって負の遺産となる。私達に出来ることは力を合わせて原発を止めることである。そのためには原発の脅威を明らかにし、反原発を国民的な運動にしなければならない。原発のうたい文句の中で「安全で、安価な、安定したエネルギー源」は既に偽りであることが分かった。最後に残った「クリーンな」エネルギー源について、その真偽を検証すべく調査・研究を行った。この結果を公表し、反原発の輪を広げて行きたい。

7-25 (NO-49) 「豊かな里海づくりと伝統ある魚食文化をめざして」

(2020年12月発表)

13期 鹿の瀬ブルース

日本の沿岸海域から魚介類が少なくなったのは、海の環境汚染が原因といわれています。魚介類がしっかりと育つ豊かな海に戻すには、人と自然（山と川と海）が共生する持続性ある「里海づくり」が必要不可欠です。なかでも瀬戸内海沿岸では、地域ぐるみの連携と協働がうまく機能しているのには驚かされました。また、地元の海から獲れた豊富な魚介類が、日々の食生活に馴染んだ郷土・家庭料理として、十分生かされ利用されているのを実感しました。

7-26 (NO-50) 養蚕の歴史

14期 藤本明美

7-27 (NO-51) 「ぼかし」ってなに？

14期 波々伯部之夫

7-28 (NO-52) 「竹林の拡大問題と竹材の活用」

(2020年12月発表)

16期 バンブー16

「筍」は青果市場で売られ農業の範疇。一方「竹」は生竹になると木化して林業の分野になる。この農業と林業の狭間が竹取物語から続く長い歴史の日本の竹を今の問題として取り上げにくいものになっている。バンブー16は里山問題として竹をとらえ、日本的な地域循環・地産地消の活用を提案する。加えて自分たちでできる竹の活用を「やってみる」研究に時間をかけている。高度利用や新しい地域への提案も加えた。

7-29 (NO-53) 「急速に進む“地球温暖化”を考える」

(2020年12月発表)

14期・15期 地産地消

私たち「地産地消 G」は地球温暖化防止の切り札となる水素エネルギーについての研究を目的に活動しております。ここ数年来、温暖化に起因する異常な気候変動は年々悪化しており、人々の生命や財産をおびやかす深刻な問題となりつつあります。今回発表する「急速に進む“地球温暖化”」では、この温暖化問題について考え、今すぐ私たちにできることを実行、また提言していきたいと思えます。

7-30 (NO-54) 「子どもの貧困に関する研究」

(2021年12月発表)

14期 いばしょ

日本は米国、中国に次ぐ世界第3位の経済大国でありながら、【子ども7人に1人が貧困状態】にあります、その子ども達は約260万人(2018年)います。全員が現状のまま放置されてしまうと、国の社会的損失は数兆円に及ぶとされています。貧困の子どもに増え続ける虐待問題、児童養護施設で暮らす子供たちや、親の低収入と教育費不足のために、教育格差による貧困の連鎖が大きな問題・課題です。子供たちのために私たちが出来ることは何か？グループの検討結果、【みんなの食堂】(2017年)及び小学生【英語学習支援】(2019年)を開催し今日に至っていますが、お母さんや子供たちから喜ばれています。

7-31 (NO-55) 在留外国人と共に生きる

(2021年12月発表)

17期 お話ファン

日本における少子高齢化が急激に進んでいる一方で、在留外国人の数は増え続け、その数2020年12月現在288万7千人を数え、国内の就業者の不足を外国人で補っている状況です。第一部では、かかる実態と制度面を含む経緯につき調査し、現在の課題と将来の展望について、一層の理解を深めることとしました。第二部の研究は、在留ベトナム人に焦点化しました。そのために焦点化の理由を明らかにし、問題解決のために「ベトナム社会外からの接近」と「ベトナム社会そのものへの接近」を試みました。そこから、コロナ禍における在留ベトナム人の問題について知ることとなりました。こうした問題に対する行政からの対応としていろいろとされていますが、まだまだ在留外国人を支援するところまで至っていません。わたしたちの研究もコロナのために、様々な計画が足止めをされました。そんな中で、ベトナム在留者への関わりを深め、「在留外国人と共に生きる」ために何が必要か、わたしたちに何が出来るかについて、協議してきました。まず、何が必要かではありますが、国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的違いを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくために、わたしたちは、「受け入れ側にとって必要なこと」と「在留外国人にとって必要なこと」の二つに絞ってまとめました。最後に、わたしたちに何が出来るかについて考察し、これからも「さらに学んで次世代のために」活動していく道筋を探りました。

7-32 (NO-56) 地球温暖化と国際的防止策に関する調査研究

(2021年12月発表)

17期 平岡三男

国際的な地球温暖化防止策の取り組みとして、「気候変動枠組み条約国締約国会議(COP)」があり年一回開催されています。今年(2021年)は英国北部グラスゴで開催(COP26)され、世界各国の首脳陣、代表人が一か所に集結しています。内容は様々で積極的な議論が展開されています。会場国は1

年ごとに変わっています。日本国内では1997年に京都（COP3）で開催され、アメリカ等ではこの時の京都議定書をめぐって一混乱がありました。しかし、現在はアメリカも通常通り参加をしており、この取り組みが、地球温暖化防止策上、極めて重要なことにつながっています。

そして今回は、日本国やその他の国々で2050年までにCO2排出をゼロにすると国際的に伝えています。大事なことは2050年という30年先のことよりも現状できうることを一つ一つ成し遂げる努力が世界中で求められていることでもあります。最後に地球温暖化国際的防止策は「人類の存亡に関わる重大なこと」であります。「時間がない！急げ！！」この言葉があらゆる取り組みの原点であります。

7-33 (NO-57) 日本の稲作を考える（かまえ農園の米作り）

（2021年12月発表）

17期 かま爺と三農婆

「人生100年時代」を生きる今、残りの時間は、まだまだ長い。米作りを始めるようになってから、その使命を身体いっぱい感じ、毎日のご飯が美味しい。さらに、より美味しい米作りを目指したい、そんな気持ちから、日本の稲作を考え、また歴史をたどり、そして現在実践している米作りを記録し、三人の女性陣と協力しながら、本研究論文を書くことにした。

自然界は循環し、成り立っている。我々の身体も、より良い循環機能により健康が保たれる。美味しいお米を食べて、エネルギーを得、そして米作りにも励む。これはまさしく、米は命の源である。食育基本法第3条では、「食に関する感謝の念と理解」について述べられている。この論文を書くことにより、親から受け継いだ米作りを、より良く理解し、さらに感謝を深めることができれば幸いである。

7-34 (NO-58) ふれてみよう島の暮らし～家島群島を巡って～

（2022年12月発表）

18期 さすらい5人衆

瀬戸内海の青く穏やかな海・新鮮な魚介・豊かな自然と遺跡・歴史・町歩きと、家島諸島の長い歴史に触れ、4回のフィールドワークを通じて、漁獲量が兵庫県一の漁業や採石、海運業・造船、そして観光などの産業の実態を調査し、日本の数多い離島が抱える問題点を家島の調査を通じて把握し、現在の島の課題と将来の方向性について提案します。今回は特にこの島の産業の中から「観光」と「漁業」にフォーカスをあて、報告したいと思います。

7-35 (NO-59) 食の安全を考える

（2022年12月発表）

18期 未来の種

最近、野菜の味の変化を感じていた。ニンジン・ピーマンなど特有の味や香りが弱まってきた。それに加えて、「タネ袋に書かれている生産地のほとんどが海外であり、それはなぜなのか？」という疑問が湧いていた。そんな中、「種子法の廃止」「種苗法改定」などタネ関係の法律が、この数年に大幅変更された。それは農家や消費者よりも企業側、特に巨大アグリ企業に有利に働くものばかりだった。この背景には、アメリカ政府の存在があり、明確な外交戦略がある。それは、タネを制し、食料を制し、そして世界を制するものである。日本政府はアメリカ政府の言いなりになり、その結果、農家は「タネ・農薬・化学肥料」などをセット購入させられ、消費者に「安全な食」を供給できない仕組みが出来上がっていった。今後もゲノム編集作物やRNA農薬など「食の安全」を脅かす技術が次から次へと生まれてくるだろう。これは、止まらない資本主義の宿命であり、不必要な「価値」を産み出し続け、農業が資本主義の食べ物にされているからである。こんな厳しい環境の中、安全・安心な「食」を得るには、生協・直販など出処がハッキリした食べ物や食料自給率の高いコメをよく食べて応援することが肝要である。特にコメを守れなければ日本の食・農は崩壊する。最後に「次世代の健康・生命を守るためには、人任せ・国任せにしないで自分自身で行動を起こさなければならない！」ことを付け加えたい。

7-36 (NO-60) 豊饒の海を

(2022年12月発表)

18期 瀬戸内ウォッチャー

瀬戸内海で魚が獲れなくなってきたとの報道に触れる機会が増えている。いったい海はどうなったのかと疑問と興味を抱き活動を始めた。研究機関、漁協、行政、下水処理場で聞き取り調査を行った。実態、原因、対策を把握し、さらに今後どのような対策が必要かなど浮かび上がってきた。漁師の高齢化問題も重なり、漁業再生が急務となっている。いかなご漁獲量が激減、養殖ノリの色落ち被害が増加、アサリなどの二枚貝が生育困難、タコの漁獲量も激減したなど悲惨な実態が明らかになる。海の生物は栄養塩豊かな海で生存できる。栄養塩を植物プランクトンが摂取し、それを動物プランクトンが食し、それが魚の餌となる。その食物連鎖の底辺の栄養塩が大きく減少している実態が解明され、漁獲量低迷の原因が明らかになってきた。海の漁業環境が、陸上(森・田畑・川)の環境や人々の生活の変化、さらに埋立てや干潟減少など開発工事の進行とも重なる。兵庫県は、栄養塩回復に向けて他県に先駆け取り組んでおり、改善が期待されている。しかし、その道のは単純ではないこともわかってきた。栄養塩が低下した今も赤潮発生が続いていることなどが影響する。漁獲量低減につれ、漁船漁業が低迷する傍ら、養殖の生産比率が高い、ノリ、カキの他に、魚の養殖が増えており、赤潮の被害を受けている。養殖の赤潮被害を食い止めながら、栄養塩回復により漁船漁業復活への道を探っていく。

7-37 (NO-61) 有機農業を実践して

(2022年12月発表)

15期 アグリくん

有機農業を学ぶには、色々な資料や文献を調べるよりも、実際に畑で農作業に関わるのが一番と思い、しあわせの村の圃場のボランティアに参加して早くも4年が経ちました。我々は、作業中に指導を受けたこと、勉強したことを、出来るだけ記録に残して今後役に立てたいと思っています。有機栽培ならではの難しさや楽しさも解ってきました。引きこもり等の障害者の支援も少し参加するようになりましたが、障害者の人達は作業を楽しんで行っているのを見ると土に触れることの大事さを感じます。

7-2 研究発表会風景

神戸シルバー大学院
第13回・研究発表会

神戸シルバー大学院 (SGS) は神戸市シルバー大学の卒業生有志が、引継ぎ農林漁業・食料・健康・大老子・環境問題等を学際・学際するに基いた任意団体です。
この度、私達が研究してきたテーマの内、下記3テーマについて発表します。
この発表を通じて農山村と都市の交流を促し、いばむかでも次世代のために魅力ある地域社会づくりを繋ぎたいと思います。多数のご来場を願いますよご案内いたします。入場料、参加費、お土産料はございません。

> 1.日時 平成29年12月20日(水) 13:00~16:00 (受付開始12:30)

> 2.場所 兵庫県立会館(9F・風見丸一) (神戸市中央区下山手通4-14-3 ☎078-321-2131)

> 3.研究発表内容

テーマ	発表者名
1) 高齢者の身体と健康	高木 鉄夫 (年齢:1年生)
2) 『日本型老老』と老老の暮らし	岩野 健児 (年齢:2年生)
3) 日本の食品と人間性について	上田 尚男 (年齢:2年生)

> 4.講演 学長: 保田 茂 (神戸大学名誉教授)
(議題)『農山村と都市環境-21 世紀型の健康の動き』
主催: 神戸シルバー大学院 (SGS)
後援: 兵庫県農村社会研究所 神戸市シルバー大学
協賛: 神戸市

SGS事務局: 森岡 真澄 ☎078-8174-0200
E-Mail: h.kobayashi@kobe-u.ac.jp

SGSHP-URL: http://kobe-u.ac.jp/~sgshp
HP-E-Mail: kobegi.kobehou@gmail.com

2017年



2019年



2019年



2021年



2021年



2021年

7-2 研究発表会風景(2020年)



未発表グループのポスター掲示



受付の様子



研究発表会の開始



来賓席



発表



質疑応答



学長講評



会場の様子

7-3 神戸シルバー大学院 研究報告一覧

NO.	研究テーマ	提出月	グループ名	研究者 氏名のあとは所属期
1	循環型自然と人との共生をとり戻すために	2005/3		松本恒司1
2	海の環境問題—陸から海を見る	2005/3		辻村允夫2
3	仮想水と食料輸入の諸問題	2005/3		山本光男2、村山一弘2、藤田祥男2
4	「道の駅の現状と在り方」	2005/1		安部浩三2、大西隆史2、河野瑠美子2 川田陽太郎1、古西啓祐2、嶋谷徹1 西尾孟三1、谷垣健治2、吉田忠史1 山口俊雄1
5	兵庫県特産酒米「山田錦」 にかんする考察	2005/3		荒木稔2、加納時春2、北井宏明2 福井義弘2
6	自然界からの警告 (1) 「BSEの研究」	2005/5		宮田 隆郎2
7	わが国の集落の将来を考える	2005/12	藁芭倶楽部	八尾美子1、木谷貞子1、盛 絹子1 堅田サチエ1、寺野初江1、平石節子1 高月営子1
8	食育について	2005/6	食育チーム	古西啓祐2、長谷川博3、藤田祥男2 村山一弘2
9	落ち葉じいちやんの堆肥づくり			嶋谷 徹1
10	「ひようご安心ブランド」 に関する調査	2005/7		大西隆史2、加納時春2、川田陽太郎1 河野瑠美子2、嶋谷 徹1、西尾孟三1
11	「生態学的循環法則下に生きる土」 について (第1部)	2006/5	土の研究 チーム	谷村良三3、中根久弥3
12	チヨウから見た地球温暖化 神戸市垂水区小川ファルトの観察から	2008/2		辻村允夫2
13	有機栽培圃場の生き物たち (I)	2008/4		辻村允夫2、高木良治4、黒崎幸雄5
14	「生態学的循環法則下に生きる土」 について (第2部)	2008/3	土の研究 チーム	谷村良三3、中根久弥3
15	私の思い出・老後の初心 — 追憶・随想	2009/3		加納時春2
16	ニュータウン近傍の 里山に棲む虫たち	2009/10		辻村允夫2
17	ひようご食の探検隊 — 探検報告探検の軌跡	2010/3		川田陽太郎1、嶋谷 徹1、阿部浩三2 大西隆史2、藤田祥男2、宮田隆郎2 角本 功6、衣笠年子6、高山吉隆6 中村 敏6、水船 修6
18	「道の駅」と“お米”	2010/3		井上健三5、今村信之5、大岡 勝5 大塚 守5、楠原式子5、中西 優5 村尾三樹雄5、山田良雄5、渡邊博治5
19	山林の荒廃・再生を考える	2011/3		笹井俊司3、塩崎充造3、徳原尚世3 十時昭美3、中嶋敦子3、細川満里子3 長谷川博3、磯崎康伯4、金築敦子4 重松清子4、山本直恭6
20	野草の研究 神戸近郊の野草(別冊)	2011/3	野草研究 チーム	木村民亮7、芝崎理子7、庄司 博7 高島忠義7、巽 妙子7、野村静代7 藤原昭宏7、村井英子7、油井秀樹7

NO.	研究テーマ	提出月	グループ名	研究者 氏名のあとは所属期
21	有機栽培圃場の生き物たち(II)鳥 生物多様性環境の視点から	2011/11		高木良治4
22	特定外来種アライグマ ー 5年間の記録	2012/2		中埜正光4
23	氷上回廊域一名前に惹かれて見て聞 いたままの記録	2012/10		山田良雄5
24	ひようご安心ブランド農産物の 販売戦略に関する提案	2013/3	安心 ブランド 応援隊	辻尾洋子8、藪内伸之8、吉田 英8 大下絹子9、高橋昇二9、宮中雅昭9 森本美智子9、鈴木只子10、高木良治4 橋口勝禧8
25	兵庫県の漁業の現状と今後	2014/3	さかな チーム	西尾 薫6、池田千恵子6、中埜勝美6 辻野ひでみ6、片山キミ子6 森田浩行6、山川好弘6、衣笠年子6
26	絵本で綴る有機農業	2014/3	手作り 絵本の会	山本尚恭6、田中映子6
27	自立した高齢者を目指して	2015/3	S G S 7	木村民亮7、庄司 博7、高島忠義7 巽 妙子7、野村静代7、藤原昭宏7 村井英子7、油井秀樹7
28	手作り植物酵素の研究	2015/3	S G S 7	木村民亮7、庄司 博7、高島忠義7 巽 妙子7、野村静代7、藤原昭宏7 村井英子7、油井秀樹7
29	日本の漁業の現状とその課題 獲る漁業から育てる漁業へ	2015/3		小野利貞10、黒澤慶章10、萩原靖忠10 福永隆昭、山本靖正10
30	日本人とお米	2015/12	ごはん 愛好家	高橋昇二9、中継正夫11、秋山静司11 納村裕子11、辻井節江11、大野一雄11 西村和子、吉川芳子11
31	食の安全とTPP	2016/2	食の安全 とTPP	庄野清和、植杉修子12、上原とも 川毛聡子、伊藤容子、森寄一由 池田絹
32	再生可能エネルギーと脱原発への道	2016/3	クリーン アース	中野哲夫11、片岡祥夫11、徳山忠子11 松本裕子、田村保子12、野村光子12 高木文子13
33	食育に関する考察 ～次世代の子供たちへ	2017/1	チーム食育	衛藤安秀9、森本美智子9、笛木弘義9 木下絹子9、宮中雅昭9、黒川昌弘9
34	食品添加物と健康	2017/2	添加物 見極め班	花岡義文、岡田忠宏12、小川睦郎 西尾律子12
35	養父市の地域創成	2017/3	地域創生 の会	坂井壽夫13、東條国広13、平山律子13 今田忠三郎13、楼本邦子13 高木文子13、永井恵美子、伊賀すみ子
36	日本の農業ー有機農業を学ぶ	2017/3	有機農業 & 元気かい	岡田忠宏12、湯浅光章12 森本美智子9、高木慎夫12 西尾律子12、広瀬範義12
37	水の研究 ～兵庫県の湧水を訪ねて～	2017/3	SGS-7・10	庄司 博7、高島忠義7、巽 妙子7 中野輝寿10、中野邦子10、藤原昭宏7 村井英子7、山川瑞子10
38	明石海峡のさかな	2017/3	鹿の瀬 ブルース	北地清治13、名執一彦13、安田静男13 有田八重子13、継山忍13
39	日本酒を考える	2018/3	につぼんの さけ物語	福永隆明11、萩原靖忠10、中継正夫11 秋山静司11、村野誠11、大野一雄11 納村裕子11、山田智恵子11 清水邦子11、吉川芳子11、辻井節恵11

NO.	研究テーマ	提出月	グループ名	研究者 氏名のあとは所属期
40	コットンから見た日本の衣と農	2018/3		藤本明美14
41	有機農業の体験と健康 ー高齢者の生き方ー	2018/3	有機農業& 元気かい	岡田忠宏12、広瀬範義12、高木慎夫12 湯浅光章12、森本美智子、西尾律子12
42	日本の食品ロス問題	2018/10	もったいない	上田尚男14、前川宏睦14、長浜速雄14 波々伯部之夫14、山脊修一郎14 藤原俊雄14島村千恵子15 今中英雄15、原美知恵15 南部ユリ子15、石井由起子15
43	再生可能エネルギーと脱原発への道 PartII	2019/2	クリーン アース	中野哲夫11、片岡祥夫11、徳山忠子11 野村光子12、田村保子12、高木文子13 藤本明美14、長浜速雄14、大内善郎14 和佐信行14
44	次世代における環境・エネルギー に関する研究	2019/3	地産地消	山寄修一郎14、大内善郎14 長浜速雄14、藤原俊雄14、前川宏睦14 和佐信行14、今中英雄15、島村千恵子15
45	マイクロプラスチックによる 海洋汚染	2020/3	La mer (ラメール)	木田奉行15、横山浩15、糟谷昭彦15 中川多賀子15、難波正志15
46	有機農業を考える	2020/3	アグリくん	松岡圭吾15、荻谷逸雄15、藤下裕史15 今中英雄15、寺本孝子15、原美知江15 南部ユリ子15
47	次世代につなぐ里山を目指して	2020/3	里山守り隊	石原清15、藤本靖子15、石井由紀子15 寺本孝子15、内藤マサヨ15、山川瑞子10 雑喉 良16
48	原子力発電の環境への影響	2020/3	アトム& ウラン	三木広志15、高尾豊紀15、島村千恵子15 内藤マサヨ15、高木文子13
49	豊かな里海つくりと 伝統ある魚食文化を目指して	2021/3	鹿ノ瀬 ブルース	北地清治13、名執一彦13、安田静夫13 有田八重子13、継山 忍13
50	養蚕の歴史	2021/3		藤本明美14
51	「ぼかし」つてなに？	2021/12		波々伯部之夫14
52	竹林の拡大問題と竹材の活用	2021/12	バンブー16	雑喉 良16、沼舘廣彦16、太田経子16 大田直子16
53	地球温暖化防止と水素エネルギー に関する研究	2022/2	地産地消	山寄修一郎14、長浜速雄14、前川宏睦14 藤原俊雄14、大内善郎14、和佐信行14 今中英雄15、島村千恵子15
54	子どもの貧困についての研究	2022/2	いばしよ	上田尚男14、大内善郎14、長浜速雄14 藤原俊雄14、前川宏睦14、和佐信行14 山脊修一郎14、島村千恵子15 今中英雄15、南部ユリ子15
55	在留外国人と共に生きる	2022/3	お話ファン	原田亮17、岡君子17、中西喜由17 藤本保士17
56	地球温暖化と国際的防止策 に関する調査研究	2022/3		平岡三男17
57	日本の稲作を考える ーかまえ農園の米作りー	2022/11	かま爺と 三農婆	釜江修一17、石田礼子17 喜田美保子17、永井ツネヨ17
58	豊穡の瀬戸内海を	2023/3		宮川善行17、沼田裕子17、谷口すみ17

7-4 学外交流の事例

(1) 日本の食品ロス問題

2018年10月、兵庫自治学会の研究発表大会において「日本の食品ロス問題」をテーマに発表、“特別賞”を受賞した。この研究テーマは神戸シルバー大学院において、「もったいないグループ」の研究活動として11名（14期：上田尚男、波々伯部之夫、藤原俊雄、長浜速雄、山寄修一郎、前川宏睦、15期：今中英雄、島村千恵子、南部ユリ子、石井由起子、原美知江）で取り組んだテーマ。

1) 食品ロスの現状

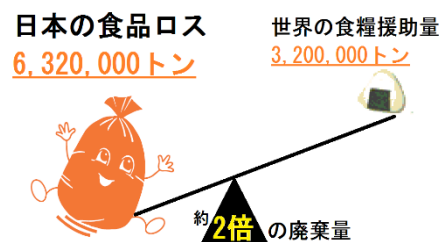
①日本の“食品ロス”は年間500～800万トンと膨大である。

これは世界の食糧援助量（国連の支援機関）の2倍。

②国内消費量（仕向量）の約3割強を廃棄している。

③毎日の食事に困る生活困窮者も多く相対的貧困率が高い。

④食品ロスの55%は食品関連業者、45%は家庭から排出。



食品業者からの廃棄



家庭からの廃棄

2) 食品ロス削減の取り組み

①国においても2013年から「食品ロス削減国民運動」を推進している。

②兵庫県においても“残さず食べよう！30・10運動”を推進。

宴会時など、最初の30分と最後の10分は残さず食べよう。



3) 食品ロス削減に対する提案（私たち一般家庭で）

①賞味期限と消費期限を正しく理解し、冷蔵庫内や在庫管理を徹底する。

②調理時に無駄な廃棄はしない、適正な調理量で食べ残しをしない工夫。

③食べきれない手付かず食品は、フードバンクに提供することも考える。

4) 食品ロス削減に対する提案（行政、食品業者へ）

①フードドライブの拡大を図り、回収拠点の多様化の積極的な推進。

②集まる食品等をフードバンクや福祉施設などへ寄贈の積極推進。

5) 私たちのグループの活動

①フードドライブなどの繋がり、子どもの貧困問題などから、みんなの食堂（子ども＋地域の高齢者）を立ち上げた。

②2017年7月から兵庫区・中道福祉センターにおいて「みんなの食堂」を50名前後のスタッフで運営している。

③2020年から月2回の開催、毎回30名前後の子どもと地域の一人暮らしなどの高齢者が参加している。



(2) マイクロプラスチックによる海洋汚染

—大阪シニア自然大学校講座部マイスターでの講演—

2019年7月10日、15期生のラ・メールのメンバー5人で「マイクロプラスチックによる海洋汚染」をテーマに大阪シニア自然大学校講座部マイスターで講演しました。

マイクロプラスチックによる海洋汚染



神戸シルバー大学院/研究グループ ラ・メール
(木田・難波・中川・横山・糟谷)

- 1) はじめに
- 2) マイクロプラスチックによる海洋汚染の現状
- 3) マイクロプラスチックとは何か？
- 4) 発生源と問題点
- 5) プラスチックごみ対策
- 6) 質問と休憩(10分間)
- 7) 質問への回答



講演のいきさつ

2018年末に14期の長浜さんから大阪シニアで講演しないかとの打診があり、ラ・メールの講演の前に保田学長が講演されることになっており、SGSの事もご存知のようなので、ラ・メールとしてマイクロプラスチックによる海洋汚染についてひとりでも多くの人に知って貰いたいとブログ発信中であり、良い機会なので受けることにしました。

長浜さんと大阪シニアの和田泰明氏は中学の同級生で、普段の付き合いの中で講演の話が出たようで、講演会の日2019年7月10日と講演時間2時間程度が決まっているとのことでした。2019年初めから論文をまとめるべく集めた調査資料や2018年1月11日から始めたブログを基に原稿素案を作成、それに併せたプロジェクター用画面をパワーポイントで作成しました。何度か推敲を重ね原稿・画面がほぼ完成したのが6月10日前後でした。2019年6月10日に大阪シニア自然大学校講座部マイスターの幹事の和田泰明氏から正式に講義依頼があり、ラ・メール講演は2019年7月10日18:30~20:30に決定しました。

初めての講演でもあり、出来るだけ良いものにしようと、仕事で講習に係わっておられたKSC国際コースの2名の方に講演を聴いて貰い、講演の仕方、内容、画面についてアドバイスを頂き、修正して本番に備えました。

講演会場、参加者数

会場：大阪産業創造館 5F 研修室

参加者：認定NPO法人シニア自然大学校マイスター16期講座生

45名(男女ほぼ同数)

平均年齢およそ65歳で、現役・再雇用など仕事を持つ者多数



講演内容、方法、時間

講演内容：ラ・メールのメンバー紹介、ブログ(ラ・メール～海からのプラスチックレポート)、2018年～2019年のプラスチックに関する主なニュース(中国の廃プラスチックの輸入禁止、カナダG7、海岸漂着物処理推進法の改正、プラスチックストロー廃止、G20 大阪)、プラスチックの歴史、プラスチックとは、世界のプラスチック生産量推移、プラスチックによる海洋汚染の現状、マイクロプラスチックとは何か、その発生源と問題点、プラスチックごみ対策(日本のリサイクルの問題点、3Rから4Rへ、ペットボトルのリデュース、給水設備でペットボトル削減、デポジット制の提案、ペットボトル回収機の導入)、今私たちに出来ること、おおさかプラスチックごみゼロ宣言

講演方法：1名が画面操作し、メンバー3人で分担し講演した。

講演時間：与えられた2時間、講演時間1時間30分程度、休憩10分(この間に事前配布の質問状に記入願ひ回収)、残り時間で質問に答えながら交流しました。

質疑応答、反響など大阪シニアとの交流状況

事前に質問や感想などを書いて貰うアンケート用紙を配って頂く予定でしたが手違いで、急遽短時間に書いて頂く事になりました。それでも24件の感想と26件(同じ質問は1件として)の質問が集まりました。時間の許す限り質問に答えましたが、皆さん非常に熱心で回答に対してまた質問や考えが出され、時間はあっという間に過ぎ、改めて後日全ての質問に対する回答を送りました。

講演の翌日には和田氏から「私達の為に何回も何回も練習され努力された跡がヒシヒシと伝わるほどのご健闘ぶりに感謝いたします。廃プラというものについてたくさんの知識を下さったお陰で、さっそく今日から実践に取り掛かっているようです。これからも地道な運動かもしれませんが、頑張ってください、私達もラ・メールの皆さんに少しでも近づけるように努力いたします。」というメールを頂きました。

7月17日のブログで「大阪シニア自然大学校講座部マイスターで講演して来ました。」を掲載しました。それを読まれ、同日和田氏より「先日は貴重なご講義有難うございました。2時間の講演は初めてだったことを知りましたがとてもそんな風には見えませんでした、共同で各自持ち分を生かしたお話でよく分かりました。又、質問に対してはとても詳しくご回答くださり恐縮いたしております。」とのメールと共にラ・メールの講演の感想を書かれた講座速報「すたそく第10号」を送って頂きました。

そこにはラ・メールの講演内容と講座生の「ひとくちメモ」として36人の感想が書かれていました。励ましやお礼の言葉、自らの実践の言葉が並んでおり、ラ・メールの宝物となりました。その中から二、三書いておきます。

5. ラ・メールのグループの会、ありがとうございます。「負の遺産」を次世代に残さない為にも、本当に考えないと、と思います。
11. 百姓です。ビニール製、プラスチック製の資材が多くあり、使っています。紫外線でボロボロになります。土に混ざってしまいます。回収していますが、すべてはムリです。数値データを示してもらったのが良かったです。
16. プラごみ問題は、最近問題となっていたので関心はありましたが、これほどひどく深刻な問題とは気付きませんでした。まず、マイバックとマイボトルの持参に努めます。

大阪シニアでの講演を行なったの感想

初めての2時間の講師経験、緊張しながらも楽しい講演会でした。シニア自然大学校講座部マイスターの皆さんは熱心に私たちの話に耳を傾けてくださり、軽い冗談には明るい笑い声があり、プラごみの現状には大きな驚きの声があがったりと、好奇心旺盛でフレンドリーな皆さんに助けられて、有意義な講演会が出来ました。



左から 中川、糟谷、横山、難波、木田（大阪シニア自然大学校講座部マイスター すたそく第 10 号より）

(3) 日本の子どもの貧困に関する研究

2021年10月、兵庫自治学会の研究発表大会において「日本の子どもの貧困に対する研究」をテーマに発表を行い、「特別賞」を受賞した。

前回（2018年）は同発表会において、「日本の食品ロス問題」をテーマに発表、同じく「特別賞」をいただいた。このテーマの研究活動において、フードバンクや子どもの貧困、一人親家庭などの課題に直面する中、このテーマに10名（14期：上田尚男、大内善郎、長浜速雄、藤原俊雄、前川宏睦、山崎修一郎、和佐信行、15期：今中英雄、島村千恵子、南部ユリ子）で取組んだ。

1) 日本の子どもの貧困の現状

- ①日本は世界第3位の経済大国でありながら、子ども7人に1人が貧困状態にある。
- ②一人親世帯の貧困率は48.1%、母子世帯の貧困率は51.4%と非常に高い。
- ③貧困家庭の子どもは、虐待やヤングケアラー、また塾や高等教育が受けられない問題もある。
- ④貧困状態の子どもが、そのまま放置されると42.9兆円の社会的損失になるとの試算もある。

2) 行政などの対策・動向

- ①国は「子供の未来応援国民運動」で地方自治体と連携して支援の輪を広げている。
- ②兵庫県は「兵庫こども・子育て未来プラン」として、児童虐待防止や社会的養育体制の充実、また一人親家庭の自立支援、子どもの貧困対策などの支援を行っている。
- ③神戸市も「神戸っ子すこやかプラン2024」として、兵庫県と同様な支援を推進している。

3) 私たちの取り組み

- ①神戸市シルバーカレッジのグループ学習のテーマで「子どもの貧困」を取り上げ、研究活動の実践的展開として、「みんなの食堂」を立ち上げた。
- ②初めはグループ学習のメンバー数名で立ち上げ、徐々に支援者・協力者が増え、現在は約50名のメンバーで運営。当初、月1回の開催であったが、月2回まで増やすことができた。
- ③小学生・幼児の他、保護者や地域の高齢者などを含めて、毎回30人前後が参加されている。
- ④スタッフによる紙芝居、手品などのアトラクションも取り入れて、大変喜んでもらっている。
- ⑤塾に行けない子ども達のためにとの思いで、2019年11月から「英語学習」の支援活動を始めた。参加者は小学生8名前後、スタッフ7名で、月1回開催している。



みんなの食堂の食事風景



紙芝居の風景



英語学習の風景